

2005年訪問活動概略

※2004年中途からは、訪問活動の記録をまとめたものを従来通りの形で公表しなくなったため、参考として、毎回の訪問活動の案内に掲載している、前の回の訪問活動の内容の概略を集めました。

1月8日

・70代男性。チラシを見て、今更なんだろうな？と思ったが、元気をもらった。ボランティアには世話になった、信頼している。仮設で奥さんを亡くされた、想いも少し伺う。

・70代男性。ここはカチッとドアを閉めれば牢獄みたいなもの。いつ死んでももうよいがな。人間、人のためになるようなことをして、働いて、東南アジアでも旅行して、今日は楽しかったわ、と言うのが極楽。いかに働いても金が貯まらんし楽しくない、と言うのが地獄。

・70代ご夫妻。「現在2人とも幸せな日々を過ごさせていただき感謝しています。しかしどちらかが倒れると、片方や近隣の方々に大きな負担をかけることになります。週末ボランティアは「終末」ボランティアとなってでも、高齢者が安らぎをもてる政治を」と、とても深さを感じさせるご夫妻と出会った。

・60代男性。5年前脳内出血で倒れ、半身不随に。家に閉じ籠っているのはアカンと、散歩りハビリでガンバルしかなかった。ボクの場合「エラかった」と言われて涙をこらえられた。

1月22日

・60代男性、ご夫妻2人暮らし。震災の時、行政の対応が遅いと怒っておられた。避難所ではお年寄りの食事が冷たくて可哀想だった。暖かいものは炊出しのみ。仮設住宅では通勤用交通費の補助が欲しかった。90分、思いを吐き出された。

・60代女性、一人暮らし。2週間毛布一枚で公園で過ごした。大分経ってから肋骨2本の骨折、大腿骨の骨折が判明。山口組に助けられた。ここは話し相手が居ない。

・60代男性、一人暮らし。ここはきれいで家賃も安く住み易い。40年以上人生の勉強をしてきた、と、パワーのあるお話しを90分。訪問ボランティアは生れて初めてとのこと。訪問者がほれこんだお人柄に、様々学ぶ。

・70代女性、ご夫妻。ご主人が入院。地震で両の足を痛めて松葉杖。震災で生活のすべてがガラッと変わった。それでも当時はみな優しくだったので過ごせた。みんな年にとって自分のことでいっぱい。心の中身が復興していない。声かけだけでも大切。これから年にとって段々大変になる、と70分の話しこみ。

・60代男性、ご夫妻2人暮らし。子どももおらず、いつ死のうかと考えている。国内の本当に困っている人にお金が足りないのに、外国へお金を回すのはおかしい。30分の交流。

2月12日

・60代男性、ご夫妻2人暮らし。市営住宅全壊。7, 8年はどうやってやってきたか自分でもわからなならないぐらい夢中で過ごした。10年と言われてそうかな、気がついたら10年経ってついていた。自然は恐ろしい。経験したものがガンバッテ伝えて行くしかない。

・70代女性、一人暮らし。薬の都合でふらつくので外には出られない。週2度のヘルパーさんで

日常生活。まわりにはお話しす人がいないので、誰ともお話ししない。同居の兄弟が亡くなり、死を考えたこともある。チラシを見て待っていてくださり、1時間のお話し伺い。

・60代男性、一人暮らし。このあたりは訪問販売などが多いのでボランティアが来ても警戒される方が多い。しかし、聞いて欲しい人は沢山いるので、諦めないで訪問して欲しい。必要無いのでは、と結論を急がずに頑張るように、と励まされた。

2月26日

訪問メモ概要は次回に

3月12日

訪問メモ概要は次回に

3月26日

・50代後半女性。ジャッキでダンスをどけたら、頭から血が噴水の様に吹き出した。病院では死んだ人も生きてる人も一緒に並べられた。仮設住宅には年寄りと母子家庭の人しか入れなかった。今でも震災のテレビなどを見ると、ブラブラだった足がうずく。2時間のお話し。

・70代女性、一人暮らし。地震の前日は満月が真っ赤だった。地震までは子ども達が近くに住み、孫が遊びに來たりして楽しかった。それがすべて壊れた。これまで何のために生きてきたのだろう、と考える。2時間15分のお話し伺い。

・70代男性、一人暮らし。震災は一人だったので、そう苦勞は感じなかった。今よりもこれからが大変。ここよりも深刻な住宅がある。1時間半のお話しを伺う。

・70代女性、ご夫妻で暮らす。原爆が落ちたのかと思った。放心状態で一日くらい身内の人も判らなかつた。避難所では昼夜を問わずケンカもめごと。60代だったので高齢者でもなく仮設住宅にも入れず苦勞した。ここでは見守りもしているが、見守られる年代だ。民生委員も辛い。見守りもほとんどボランティアなのに「お金をもらってるからやっているんやろ。タダでやる仕事やない」と言われる。困っているのは高家賃。何とか市営住宅に入りたい。

・70代男性、一人暮らし。車に2泊したのち京都へ移住、5年後に神戸へ帰って來た。震災のことをお話しするとイライラする。怒りがこみ上げてくる。最近つれあいを亡くされ、戸惑いに病状が現われる。

4月9日

・70代女性。主人が昨年亡くなりました。公団で家賃が高いので困っています。市営住宅に申し込んでも外れてばかりです。

・60代男性。心配なことは家賃が年々つりあがっているもので、ずっとここに住みたいのですがそれが出来ないことです。市営住宅に入るつもりですが、なかなか入居できない。

・80代男性。ここは家賃が10万円くらいで夫婦2人の年金で支払っていますが、どちらか死んだら払えなくなります。市営住宅などを申し込んでも当たらない。

・60代女性。全壊の家の下敷きで5時間。窒息しそうで生きた心地がしなかつた。避難所は死体がゴロゴロして入れず、三日間は飲まず食わず、三日後に救援物資が届いたが自治会がなく知らなかつた。通り掛かりの中学生の子がくれたパンが最初の食べ物。忘れられない。

・70代女性。「ボランティアの方々のご活躍されていることで、今は元気で必要としませんが、いずれお力添えいただく日もあると思い、その点、勇気づけられます。

4月23日

(記録なし)

5月14日

(記録なし)

5月28日

・80代女性、一人暮らし。背筋を伸ばしたハキハキしたお話し。生活保護の勧めも「大事なみんなの税金や、ほかの人のところへ！」とことわり、困った人を見過ごせない正義漢。80分に及ぶお話しに、訪問者一同は圧倒されてただ学ぶばかりであった。

・70代女性、ご夫妻で暮らす。家は全壊したが犬の散歩中で助かった。「コンクリートが波打っていて、私も犬も立っていられなかった」「いつもくじに外れてここも最後に入った」「近所付き合いは要らないが、近くの部屋に孤独死の方を見て、夫婦のどちらかが倒れたら誰がいてくれな」と不安を残される。

・70代男性、妻子と3人暮らし。公園の下のスペースにマットを引いて暮らしたが、風邪を引き、病气入院がちの中で会社を首にされた。夫婦の年金にパートをして働いてもみんな家賃でなくなって行く。国や市の対策は不十分、とこれからの心配を1時間のお話しに伺う。

・50代女性、父母と子ども4人暮らし。震災10年はキレイことだ、何にも終わっていない。年寄り子ども優先はウソだ。「神戸からの発信」というが、被災者に何のメリットがあるのか。神戸は早よ変わらなあ。「自分の命は自分で守るのよ！」と若い訪問者に力を込められる。

6月11日

(記録なし)

6月25日

・60代女性一人暮らし。兵庫で被災。ゴゴゴゴと音がして、部屋が揺りかごのように揺れ、台所が崩れテレビが飛んでタンスが倒れてきた。40歳の頃からくも膜下出血で手や足や目が不自由な生活だった。そこから避難所・仮設・ここへと、人を助けた分助けられ、明るさいっぱい、の貴重な一代記をお伺いした。心から「お元気で、ありがとう」とお礼を述べた。

・80代女性一人暮らし。中央区で被災。戦災にも13年の洪水にも出会ったがいずれも無事だった。10年は早かった。ストレッチをし、お気に入りのクリームでエステをし、年寄りの匂いがしないように一日2回シャワーを浴びる若さの秘密を交え、1時間心のお話し伺い。

・80代女性一人暮らし。東灘で被災。2階建てが1階になった。精神的に疲れた。子どもの家に避難後仮設で自由にしていた。ここは人間関係の付き合いが、生活が異なる方ばかりで難しい。集会所を安く使えるようにし、集まりの工夫をして欲しい。

・60代男性一人暮らし。仕事後に6人で飲み会に行き、5名が泊ったが自分は無理に帰った。翌日泊ったうち4名が亡くなった。自分も職場に行けず、そのまま救助活動に参加した。

7月9日

・70代男性、ご夫妻2人暮らし。震災はもう思い出したくないというお話しの中に、在庫品のすべてを失ったご商売の方にもたらした震災の悲劇を垣間見た。これは借金地震だ、との明快なお話し。身体を半分戦争の中に置いてきた、と心に秘める多くの一端を語られた。

・60代女性、一人暮らし。ペッチャンコの家の中に埋まっていた。コタツがなければ死んでいたと言われる。救援物資は何も、毛布一枚ももらわなかったと言う。3月に水が出るまで仕事にならなかったというご商売の方の実体験を伺う。

・80代後半男性、息子さんと2人暮らし。兵庫で自家商店が被災全壊。公費解体で、今では土地も手放す。地震で商売は止めたが、避難所でボランティアとして腕を振るわれた。仮設に移ってすぐ脳梗塞で車椅子生活になり骨折も。13年の洪水やシナ事変、大東亜戦争と2度にわたる出征から奇跡的に生還されたお話しなど戦争体験も、車椅子の上からお伺いした。

7月23日

・70代女性。震災で10年来のお店がつぶれ、4年前にご主人を失われた。趣味を生かした前向きな生活を様々にお話しし伺い。一人ぼっちではだめだと言われる。

・50代男性。地震の前に数々の予兆に出会う。若い頃の事故とこの震災でダブルパンチ。今でも何度も倒れる。子どもの頃の珍しい楽しいお話しなどを交え、約1時間のお話し伺い。

・40代男性。真夏には43℃になる部屋の構造を訴えられる。せめて外気と同じ温度に。熱中症で死んでも「コドク死」ですまされるんやろね、つらいもんなや、と訴える。

・80代女性。昭和13年の水害で床上浸水。戦災で爆弾におわれて町中逃げ回った。震災で神戸の親戚は全部やられた、とこの70年来を一気に思い出しお話しされる。

・40代女性。最近、自律神経失調が発病。子どもを連れた仮設住宅のつらい生活など震災以来のつみ重ね。地震が来たのですべてが狂った、と約1時間のお話し伺い。

8月13日

(記録なし)

8月27日

・70代男性。ボランティアが何をしてくれるのか、とはじめは怒りの声が、次第に震災の体験と老人福祉政策への訴えに。折からの選挙に絡みご意見を述べられる。

・60代男性。戸口で6名のボランティア男女に、とても書ききれない悲痛なお話しの数々。厳しいが尊い努力に、思わず握手を求める。お電話番号はと訊ねると、金のかかるものは一切ないとのこと。これは本当のお話しなんだよと、帰りに若い人に解説が必要だった。

・70代女性。震災直後に手術、加古川の仮設から神戸の病院に通うのに、お腹を押さえながら泣きました、と。被災のつらく悲しい経験からボランティアを5年間努めた。

9月10日

・70代男性。自宅は被災全壊。怪我で入院中で命が助かった。病院はケガ人であふれ無残な様子を垣間見た。仮設住宅は寒さと暑さでつらかった。つらかったことを言えばみんな同じだ。ぶつけてゆくところがないから溜め込んでしまうこともある。みな同じだ。

・60代男性。ネコやネズミが数日前から居なくなっていた。周囲の建物が崩れたので不気味に夕焼けのようになった浜や水平線が見えた。仮設は寒く酒を飲み、血糖値が上がって緊急入院。子どもの作文に「仮設は季節通りです」という言葉があった。震災は人生の墓場だ。

・70代女性。ちょっとした物音でも未だにビクツとなる。仮設住宅はよかったと言われる。この住宅のトラブルをまとめてお伺いした。震災は余り思い出したくないと言われながら。

9月24日、400回目

・50代女性。8人家族を抱えての被災、一家のやりくりのご苦労とご奮闘を伺う。

・70代男性。戸を開けた時驚かれたご様子で開口一番「ボランティアは要りません」。終始警戒されたお話しが最後に「困っていることはない。困っているのは金だけだ」と笑顔に。

・50代女性。コタツと畳の間で助かって自力でドアを壊して脱出、外は家が全部倒れてもつけられない凄い火に。「こんなことがあるのか」と言葉もないご経験をお伺いする。

・90代女性。地震の時、2階に孫といて怪我もなく助かった。近所の方は何十人と死んでしまった。圧死だった。今は幸せ、と可愛いおしゃれできれいな方のお話を伺う。

10月8日

・80代女性。3階が1階となり生き埋めで気絶。数時間後「生きていたら声出してー」の声で目が覚めた。まわりでは火が出ていた。誰が引っ張り出してくれた。何故か体がびっしょり濡れていた。背骨を痛め今も苦しんでいる。震災で人間嫌いになった。笑顔をなくした。

・70代女性。震災後にご主人に先立たれ、不自由はないが人との付き合いが少ないのが不安。独りでいるのはさびしいしつまらない。機会があれば社会参加したい。人の世話をしたいけど、世話をするには元気でなくっちゃね、と前向きのお話を伺う。

・70代男性。人と付き合っていなかったから、震災の時も特に感じたことはなかった。毎日リハビリへ通っている。歯がないので硬いものが食べられない。目が悪く新聞が読めない。親も奥さんもおらずずっと一人暮らし。楽しみと言われても何もない。

・50代女性。「震災で変わったこと、それは病気になったこと。」避難所で突然目が回り出し、高血圧とのこと。子ども3人抱えて5人で避難所と仮設を2ヶ所やっところがあった。10年間色々なことがあった。中学だった子が結婚して孫が出来た。孫は可愛い。

10月22日

・70代女性。親戚で、つぶれた家に戻り子どもを助け出してから火災が起こり家から出られずにいる夫を助けられなかった人がおり、その後精神的におかしくなってしまった。その後の様子など親戚だからかえって聞けない、などなど、悲痛なお話しに言葉もなかった。

・70代女性。「これ何」って感じ、地震とは思えず。避難所は一日何も食べ物はなかった。パジャマにカーデガンとつっかけて貴重品の手提げをもっただけ。10日後ぐらいに家に戻ったら色々盗られていて何もなかった。財布の中身も盗られた。保険証と運転免許証はあった。

・70代女性。失神して気がついたら駐在所に寝かされていた。近所の方が助けてくれたらしいが地震のことは知らない。仮設は私にとっては天国だった。戦争からの数奇な運命をお聞きし「自分は運がよかった、自分の生活に拍手」と言われるこの方に、心から心から拍手。

11月12日

・60代男性。長田で全壊全焼。近所の救出を手伝っていたら家は燃えた。何も取り出せず。避難所から大阪へ、西区の仮設からここへ。失業してガンを手術し電車での移動は出来ない。テレビを見ると電気代がかかるのでラジオのみ。いつ死ぬかわからない。覚悟している。

・70代男性。中央区で全壊、隣の人が亡くなった。木造で横倒れ、三日目に掘り出された。通電による発火も見た。3年ぐらいもめた。ここは寄せ集め。入れ混ぜになっている。自治会の世話は女性でないと出来ない。ここもこれからは落ち着いてこざるを得ない。

・60代ご夫妻。長田で全焼。裏の屋根伝いに逃げた。暖かいおにぎりをもらって涙が出るくらいうれしかった。仮設はよかった。和気あいあい。前後左右お付き合いがあった。よい友達も出来た。もう忘れたい、忘れたいけど忘れられない。ご夫妻のお言葉に涙が出た。

11月26日

(記録なし)

12月10日

(記録なし)

12月24日

・70代女性。20歳の頃に終戦を迎え、自分に青春はなかった。今日は震災のお話しと言われたので戦災のお話しはしなかったが、このお話しなら山ほどある。平和でなければ…としみじみ言われる。

・70代女性。全壊で西区の地の果ての仮設で3年過ごした。人生で一番大きな出来事。価値観が変わった、物が欲しくなくなった。助け合って生き抜いた夫も最近ガンを失った。空襲の時も神戸は焼け野原だった。仮設に居た頃週末ボランティアの訪問を受けた、と懐かしく。

・50代女性。街の一角が全部つぶれ、火が出て多くの死者が出た。仮設住宅で家族がみな健康を損ねた。ここへ来て急ごしらえの住宅に入り、寒さと物音に悩まされている。

・80代男性。「外は寒いから、あがって、スリッパはいて」と室内に上げていただきすぐお話しが始まった。ひどい目にあいっぱなしやけど100歳まで生きたいと、ハンデにめげずしたたかなお心と楽しい1時間のお話しを頂く。